ISSN 0027-9153

月報

国立国会図書館

特別企画　阿刀田高インタビュー

本と読書の曲がり角—ふたたび図書館の現場から

第1回　図書館と私

ようこそ、心躍るひとときへ—蘆原英了コレクションの世界—

1．バレエ

2014.1
No.634

国立国会図書館利用案内

東京本館

所　在　地　〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号　03(3581)2331
利用案内　03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間　月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は 17:00までです。
資料請求受付★　月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。
即日複写受付　月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
後日郵送複写受付★　月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　利用者サービス部　サービス運営課　03(3581)2331　内線25211

関西館

所　在　地　〒619-0287　京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号　0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、
科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間　月～土曜日 10:00～18:00
資料請求受付★　月～土曜日 10:00～17:15
セルフ複写受付　月～土曜日 10:00～17:30
即日複写受付　月～土曜日 10:00～17:00
後日郵送複写受付★　月～土曜日 10:00～17:45
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　関西館　総務課　0774(98)1224［直通］

国際子ども図書館

所　在　地　〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話番号　03(3827)2053
利用案内　03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/
利用できる人　どなたでも利用できます。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料　国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間　火～日曜日 9:30～17:00　※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。
第一・第二資料室の利用時間　閲覧時間　火～土曜日 9:30～17:00　資料請求受付　火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間　即日複写受付　火～日曜日 10:00～16:00　後日郵送複写受付　火～日曜日 10:00～16:30
複写製品引渡し　火～日曜日 10:30～12:00　13:00～16:30

■見学のお申込み／国立国会図書館　国際子ども図書館　03(3827)2053［代表］

1 January

CONTENTS

02 国立国会図書館の使命を着実に果たすために　平成26年の新年を迎えて

04 鏡餅は語る　ある伯爵家のお正月
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

06 特別企画　阿刀田高インタビュー
本と読書の曲がり角―ふたたび図書館の現場から
第１回　図書館と私

15 ようこそ、心躍るひとときへ―蘆原英了コレクションの世界―
１．バレエ

24 日本の子どもの文学－国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み
「児童文学者」コーナーから「21世紀の子どもの本」コーナーへ

26 数字で見る国立国会図書館　『国立国会図書館年報　平成24年度』から

22 館内スコープ
過去と未来をつなぐWARP

23 本屋にない本
○『じょせつき 創立50周年記念社史』

28 NDL NEWS
○法規の制定
○平成25年度国立国会図書館長と行政・司法各部門支部図書館長との懇談会
○国際政策セミナー「欧州におけるリージョナリズム－道州制論議への示唆－」

30 お知らせ
○子どものための絵本と音楽の会
○平成25年度アジア情報研修
○「国立国会図書館デジタルコレクション」にリニューアルします
○図書館向けデジタル化資料送信サービスを開始します
○関西館小展示（第15回）「日本酒の近代化と洋酒の国産化」
○国際子ども図書館展示会「子どもを健やかに育てる本2013－厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）」
○新刊案内　国立国会図書館の編集・刊行物

国立国会図書館の使命を着実に果たすために

平成２６年の新年を迎えて

国立国会図書館長　大滝　則忠

新年あけましておめでとうございます。

年頭に当たり、日頃の衆・参両議院の国会議員の皆様のご指導、また、本誌の読者の皆様からのご支援に対して、誌面を借りて心からお礼申し上げます。

国立国会図書館は、国内外の資料・情報を広く収集し、それらを基盤として、国会の活動を補佐するとともに、行政および司法の各部門、そして広く国民に図書館サービスを提供するという任務を担っております。このような変わらない使命を再確認し、短・中期的に取り組むべき活動目標として、一昨年に「私たちの使命・目標2012-2016」を公表し、昨年はさらにそれを具体化した「戦略的目標」を取りまとめました。本年も引き続き、この目標の実現に向けて、着実に取り組んでまいります。

ここで、本年に取り組むべき課題のうち、4点の重要事項について申し述べたいと思います。

第一に、国会の活動を補佐する役割においては、国会議員の皆様からのご依頼に応じ、さまざまな国政課題に関して迅速かつ的確な情報提供に引き続き努めます。また、国内外の制度・政策・立法等に関する予測調査や、分野横断的な調査プロジェクトの取り組みを一層強化してまいります。さらに、国民と国会をつなぐ役割の一端を担い、衆・参両議院事務局と連携しながら、国会が行う立法・行政監視等の諸活動から生まれる「国会関連情報」を発信する機能の拡充に努めます。

第二に、本年1月から、国立国会図書館がデジタル化した図書・雑誌および博士論文等の所蔵資料のうち、絶版等の理由により一般的に入手が困難なものについて、全国の図書館等に画像データを送信するサービスを開始いたします。現在、国立国会図書館の施設内でのみ利用可能な約180万点のデジタル化資料のうち約131万点を、国立国会図書館の承認を受けた全国の図書館等の施設内

で、利用者の皆様が閲覧したり、部分的に複写したりできるようになります。

また、視覚障害のある方や印刷物を読むことが困難な方のために開発されたデジタル録音図書の国際標準規格（DAISY）により、国立国会図書館が製作した学術文献録音図書等の送信サービスも開始いたします。全国視覚障害者情報提供施設協会が運営する「視覚障害者情報総合ネットワーク（サピエ）」とともに、ご活用いただければ幸いです。

第三に、民間が発信しており、インターネット上に無償かつDRM（技術的制限手段）なしで流通している電子書籍・電子雑誌等の収集事業に、引き続いて鋭意取り組んでまいります。この事業は、昨年7月から国立国会図書館法に基づく制度として始まり、10月からは国立国会図書館の施設内で閲覧提供を開始いたしました。本年は、出版者から送信していただいた電子書籍・電子雑誌等を受け入れるシステムが稼働する予定です。

また、昨年4月の学位規則の改正をうけて、今後はインターネット上に公表されることになった、電子媒体の博士論文の収集および閲覧サービスの提供を開始いたします。

一方、有償またはDRMのある電子書籍・電子雑誌等を収集する制度の構築については、引き続き、館長の諮問機関である納本制度審議会においてご議論いただきます。制度化に先立って、出版界をはじめ関係の皆様のご理解をいただくよう、段階的なアプローチも踏みながら進めてまいりたいと考えています。

第四に、昨年3月に公開した「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（愛称：ひなぎく）」の構築事業に、引き続いて強力に取り組む所存です。この事業は、国全体で東日本大震災に関するあらゆる記録を分担して保存し、被災地の復旧・復興、今後の防災・減災に活用するとともに、未曾有の大災害の記録を後世に伝えていくことを目的としています。時間の経過とともに、大震災に関する記録の散逸や関心の低下が懸念されておりますが、関係者の皆様のご理解ご支援をいただきながら、粘り強く取り組むことが不可欠となっています。今後とも、関係諸機関との連携を進めながら、コンテンツの拡充に努めてまいります。

以上、本年に取り組むべき4点の重要事項を取り上げ、ご紹介しました。このほかにも、公共図書館等による「国立国会図書館サーチ」やNDL-OPAC経由での書誌データ利用の拡大に向けた取り組み、国際的な動向を踏まえた目録規則改訂の検討、国立国会図書館が所有する書誌データやデジタル化資料の二次利用の拡大に向けた検討等、喫緊の課題は多く、それぞれに誠実に取り組んでまいりたいと思います。

新年を迎えて、国立国会図書館は、情報社会における知識・文化の基盤を担うため、一層の創意と工夫を図り、皆様のご期待に応えてまいりたいという決意を新たにしております。

今後とも皆様の一層のご支援ご鞭撻をお願い申し上げ、新年のご挨拶といたします。

今月の一冊 January

国立国会図書館の蔵書から

鏡餅は語る　ある伯爵家のお正月

葦名　ふみ

【写真1】有馬家の菊の間

「年中行事」
<請求記号　有馬頼寧関係文書113-12>
※東京本館憲政資料室所蔵。閲覧はマイクロフィルムとなります。

上の写真を初めて見たとき、ただならぬ大きさの鏡餅に目を奪われました。手前にある椅子のサイズと見比べてみると、驚きはひとしおです【写真1】。

百貨店のディスプレイならいざ知らず、一家庭で飾られたものとは思えないほど、この鏡餅は手の込んだつくりになっています。飾り方を描いた絵【絵1】に目を転じると、写真では目を凝らしても見えない串柿なども使われています。

この写真はある年の正月に、旧久留米藩主の有馬伯爵家の「菊の間」を写したもので、「年中行事」という冊子に貼り込まれています。撮影年は判然としませんが、大正から昭和初期にかけてのものと思われます。

この冊子を作成したのは、当時の有馬家の庶務課です。家の中に庶務課があるとは役所さながらですが、旧大名家の有馬家ともなると所有地の管理もあって財政規模も大きく、庶務課や会計課が設けられ、家令・家扶・家従をはじめとする様々な序列の使用人を抱えていました。この冊子は、まさにこうした家に仕える人の筆によるもので、翌年、ひいては将来のために年中行事の先例を伝える趣旨の記録であったと思われます。先祖頼咸（よりしげ）の祭祀や当主の誕生日と比べても正月についての記録は事細かで、ことに鏡餅については写真と絵を両方添えるなど、記録に力が入っています。しきたりどおり飾るのにそれだけ苦労があったものでしょうか。

これほどの鏡餅を飾る家のこと、有馬家の正月は多端です。憲政資料室では昭和2（1927）年から第15代当主となる有馬頼寧（よりやす）の日記【写真2】も所蔵していますが、日記をあわせ読むと、正月に旧臣（久留米藩のかつての家臣）の訪問を受けて膳をふるまうなど、旧大名家ならではの正月の交際の姿がより鮮やかに見えてきます。

有馬頼寧【写真3】は有馬頼萬（よりつむ）の長男として生まれ、東京

【絵1】
鏡餅飾り付けの図 「年中行事」より
三宝の上に奉書紙を敷き、譲葉やヤブコウジを置き、鏡餅、昆布、菱餅、大々、串柿、エビ、熨斗などを飾っていく。

【写真2】（左）
有馬頼寧の日記

【写真3】（右）
有馬頼寧（1884～1957）
電子展示会「近代日本人の肖像」より
http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/540.html?cat=29

参考文献
- 尚友倶楽部，伊藤 隆 編 『有馬頼寧日記』 全5巻 山川出版社 1997～2003
- 華族史料研究会 編 『華族令嬢たちの大正・昭和』 吉川弘文館 2011
- 倉富勇三郎日記研究会 編 『倉富勇三郎日記』 第2巻 国書刊行会 2012

帝国大学卒業後、農商務省勤務を経て貴族院議員や第1次近衛内閣農相を務めた人物です。農民組合運動にも関心を寄せ、のちに大政翼賛会の初代事務総長を務めるなど、異色の華族としても知られました。

さて、冊子「年中行事」にみえる、慣習を尊重する発想と対比して興味深いのは、他ならぬ頼寧の習慣や儀式に対するシニカルな見方です。

大正9（1920）年の年頭には、「今年は廻礼もせず年賀状も絶対に出さなかつた」と慣習に小さな抵抗を試みます。「自分自身其必要を認めぬのにするのは面白くないので断然実行した」（大正9年1月1日条）と日記の筆致こそ潔いものの、華族家の次期当主の身であれば、周囲を困惑させる行動だったと思われます。翌年には「虚礼ではあるが有害ではない」と、苦しい理屈で自分を納得させて年賀状や挨拶回りを再開しますが、大礼服を着て自動車に乗って挨拶に回ると広い道を狭く感じる、平服を着て電車のつり皮につかまっている時のような穏やかな心持ちにはなれない（大正10年1月2日条）、となお葛藤を綴ります。

頼寧の日記は断続的に昭和32（1957）年まで残され、年頭の箇所を読み比べることで、正月の変化も知ることができます。維新から時を経て正月に有馬邸を訪問する旧臣が減少していったことも日記からうかがえ、戦時下には雑煮の記述が正月の彩りをささやかに伝えます。

かつて頼寧が不満を覚えたように虚礼と伝統は紙一重ですが、正月は慣習や伝統なるものに思いをいたす時期かもしれません。正月が一家族の行事にとどまらなかった往時の有馬伯爵家であればなおさらのこと、この冊子が、旧大名家の格式とその背後の労力を伝える得難い記録であることは確かなようです。

（あしな　ふみ　利用者サービス部政治史料課）

特別企画 阿刀田高インタビュー

本と読書の曲がり角
―ふたたび図書館の現場から

第1回　図書館と私

インターネット技術の進展によって表現者と読者の間の敷居が低くなった現代、文字による表現活動のありようは大きく変わってきています。

阿刀田高氏は作家として多くの作品を世の中に送り出し、日本ペンクラブ会長としても活躍されました。また、文化庁文化審議会会長として、日本語文化について専門的な見地から助言を行ってこられました。国立国会図書館OBでもあり、図書館事情にも精通しておられます。

現在は、混沌の様相を呈するインターネット世界に正対し、作家の利益を代弁する立場にあると同時に、平成24年4月には山梨県立図書館長[1]に就任され、住民に対する図書館サービスの担い手として、図書館現場で陣頭指揮しておられます。一見、利益の相反するかのような二つの世界にまたがり、ご活躍されている氏に、インターネット時代の日本語文化の行く末と図書館の役割、国立国会図書館への期待などについて伺いました。そのインタビューの様子を今月と来月の2回にわたってご紹介します。

（聞き手：総務部総務課）

1　図書館と私—国立国会図書館時代

——本日はお忙しい中、お越しいただき、ありがとうございました。阿刀田先生は文芸・出版界に身を置きながら、山梨県立図書館長としてもご活躍中です。作品を執筆する作家と、作品を広く提供する図書館という二つの世界にまたがってご活躍されているお立場からのお話をいろいろと伺いたいと思っています。

まず、作家になられる前までの時代を中心に、図書館との関わりについてお聞かせください。

図書館に職を得る

少なくとも学生時代に図書館員になろうとはいささかも思っていませんでした。新聞記者にあこがれておりましてね。ただ、肺結核にかかったものですから、当時は特に新聞記者はそんな肺結核の既往症を持っていたら採用されるはずもありませんので、就職で結構苦労しまして、体にもそんなに無理のない職場ということで図書館を選びました。大学を出てから図書館職員養成所[2]の別科というのかな、大卒者が入る1年コースというのが当時ありましてね、そこに大学を出てから行ったんですよ。大変就職率がいい上に本は嫌いでないし、仕事もそんなに無理がかからないだろうと思いましてね。そこでだんだん就職を考えているうちに、後になって、ここ（国立国会図書館）は別に図書館司書の資格を持ってなくたって職員になれるんだという話を聞いて多少びっくりしましたが、まあとりあえずということで採用試験を受けて、幸い職員になれたんです。

今思えば図書館の仕事よりは、もう少し人間臭い仕事の方が性にはあっていたのかなという気はいたします。一般の区立・市立図書館ですと、人との接触なんかもずいぶんありますが、国立国会図書館は図書館の中では極めて特殊で、ずいぶん雰囲気が違いますからね。図書館職員養成所の学生だった時にここに研修に来ているんですが、「同じ図書館でもここはずいぶん地味なとこだなあ」と思いました。まだこじんまりした所帯だったせいもあるんでしょうけど、採用試験の面接で、私がここで実習をしていたことを試験官たちは知っていたんですね。だから「図書館でどういう仕事が面白いと思うかね」と聞かれましてね。「面白い仕事あったかな？」と考えてもすぐに思いつかなくて、うっかり「館長が面白いと思います」って言っちゃたんですよ。言った途端に「しまった、これで、せっかくここまで漕ぎ着けたのに、これで採用はだめかな」と思ったらね、やっぱりここにはリベラルな人がいるらしくて、「いきなりは無理だな」ってね。結局採用されたところを見ると、あの失言も寛大に聞いてくださったんだろうと思います（笑）。だから最初から図書館員になろうと思ったわけでもなかったんです。

まあ、病気で療養所生活をやっているとね、なんといっても公務員がいいんですよ。当時は、肺結核は再発の可能性が皆無とはいえませんでしたからね。もし、次になったときには、国家公務員をやっていると月給は7割方もらえるし、食費も何もみんなかからないし、だいたい貯金を残して退院していくという時代でしたから、そのためにもここはいいなと思ってね。最後まで勤め上げて、共済組合年金をもらって、老後は菊の盆栽でも作って、静かに一生を送ろうと思って入った、本当にそうだったんですよ。

赤坂離宮に通勤

赤坂離宮（現、迎賓館）に国立国会図書館があっ

赤坂離宮時代の国立国会図書館（1949）

建設中の永田町庁舎（1959）

た頃に入館したんですが、のどかでしたよ。網格子のような門のところに立つと、たいがい婦人雑誌がモデルの撮影をやっていましてね、それをちょっと覗いて。だいたい四ツ谷の駅から本来の道路の方が逸れて、自分の勤め場所の方がまっすぐに行くんですから、それだけでも少しいい気分で。そこでちょっとモデルの顔を見ると、遥か向こうの入り口に出勤簿を持った人が出勤簿を振っているんですよ。出勤簿の時代ですからね。立派なグラウンドがあって、もういつだってソフトボールが楽にできる。でも、大変なのは建物の中にトイレがないのですよ。ちっちゃいトイレが一つだけ地下にはあるんですが、だけど一般の人のためのトイレは外にあるんです。だから雨の日に下痢などしていると大変だね。そういうと誠に典雅な職場環境でしてね、はでなシャンデリアが垂れている下で、夏季手当をもう300円付けろ、なんて組合の交渉をしているわけですから、ちょっと不思議な職場で。

新館、まさにここ（国立国会図書館永田町庁舎）が建てられ始めていまして、新しいところが出来るんだなと思って希望に胸をふくらませておりました。私はここでは和書の分類係で6年、洋書の目録係で5年だったか、図書整理の仕事を経験しました。和書の分類係としては大変優秀なよく働いた職員でした。洋書の目録になってからは、だんだんちゃらんぽらんになっていたという具合だと思います。

二足の草鞋を履く

――洋書の係にいらしたころには何か書き始めていらしたのですか？

もう、少し書き始めていました。私がものを書き始めたりしたのは、ただひたすらここの月給が安いもんだからやったのです。早くから両親を失っていて、すべて自分の住む所から一切合切自分の賄いで生きていかねばならない立場で、月給の安いのは困るんですよ。当時は、三鷹の「よくもまあ」というような三畳半の部屋に住んでいましたけどね、月給の安いのが骨身にこたえたもの

だから、アルバイトで雑文書きを始めました。だんだんそれが昂じてきて、新聞記者をやりたいなと思っていた訳ですから、何かものを書いてみたいという心はあったんだろうと思いますね。こちらの方へ夢中になって、終わりの頃は図書館の給料よりもアルバイトで稼ぐ給料の方が多くなりましてね。そのくらい元の給料が安かったという考えも当然成り立つんですが。

ものを書いて稼ぐのは、公務員法違反になるのかどうか、なかなか難しいけれども、大学の先生だって著述を出している人は山ほどいるわけだしね、ここの職員の方でも著述を持っておられる方ってのは別に珍しくなかった。私の場合は書くことが少しくだらないけれども、でもどこからがくだらなくて、どこからが許容されるかってのは微妙な問題ですからね。「おまえ原稿書いていて稼いでいるからけしからん」というのは、上の方も言いにくいところはあったかも知れません。それに、特に前半はわたし、本当によく仕事しましたから。だから、だいたいそういう人ってのはね、仕事するんですよ。二足の草鞋を履いている人ってのは、仕事をしないと糞味噌に言われるものだからね、よう働いていた時期もありましたよ。最後の2～3年はちょっと怪しかったな。

図書館というところはいろんな人を「飼っている」もんで、もの書きは決して珍しくはないですね。当時、唯一、作家で課長さんだった、山崎さん[3]という方がおられましたがね、どちらかというと地味な純文学の書き手でした。別な例では、朝倉さん[4]みたいな書誌学の方、あと、江戸の浮世絵の大家、鈴木重三さん[5]なんかもいました。いろんな意味での執筆活動やっている人とか、ここを起点にして大学で教鞭を執るようになる方なんかはずいぶんいましたからね。わたしは書くものがちょっと不思議な世界でしたから、異色だったかもしれませんがね。

2　図書館と私ー作家時代

分類から見える世界

——退職して作家活動を本格的に始められてから、図書館をどうご覧になり、どう関わって来られましたか？

図書館を離れてみて、図書館時代で一番面白かったし、役に立ったなあと思ったのは、やはり分類係です。当時、係長1人、係員1人という体制で、つまり和書の分類の仕事は、基本的に全部がわたしの前を通っていったということですよね。だからある意味では、日本のあらゆる知識が私の前を通っていきましたから、「知らないことってのは世の中にずいぶんいっぱいあるものだなあ」と思いましてね。そこの係になってからいろんな分野の概説書を読みましたね。お経に分類があるなんていうのは、当初考えてもいなかったですから、改めて大蔵経目録なんていうのを見まして、「ああそうか、お経ってのはこんなふうに分類されているのか」と思ってみたり。キリスト教関係は、もう出版社でわかるんですよ。ドン・ボスコ[6]がプロテスタントの本を出すってことはあり得ないんです。カトリックはカトリック、プロテスタントはプロテスタント。わたしはもう本当に、基礎医学と臨床医学の区別さえ知らなかったんですよね。こないだ亡くなった山崎（山崎豊子）さんの白い巨塔[7]が映画になってね、ああそうか、臨床医学と基礎医学の教授とは全然話が違

うんだなと。ふつう医学やった人はみんな医者なんだろうと思っていました。医者ではあるんだろうけれども、基礎医学やった人は風邪ひとつ治せないかもね[8]。分類表の基礎医学の「肺」をやっている医者と、臨床医学の「肺」をやっている医者とでは、やっていることは全然違うと言っていいんじゃないのかな[9]。当然それは本にも反映されてくる訳です。とにかくいろんな分野の概説書を見て、「ああこの世界は大体こういうことなのか」ということを勉強したのは非常に役に立ちましたし、時々、妙な知識が得られるもんですから、後々役に立ちましたね。

図書館を知る、検索を知る

やめてから暫くはここの図書館の本を利用していました。神田の書店で探すより、やっぱりここの方が早くて確実だったし、とにかく、「ここにこの本はあるはずだとか、こういうことについてはあそこ」とよく知っていましたから。

このごろは検索の方法がどんどん発達しましたけれども、検索の網にかかりやすい情報と、非常にとらえにくい情報というのがあるんだということを極めて具体的に知っていて、これが小説を書くような知識を基盤とする仕事をやる上で、とても役に立ちましたね。

——具体的に、検索にかかりにくい情報とはどのような情報でしょうか？

例えばね、桜をテーマにした小説っていうのだったら探しようがあるかもしれない。でも、その中で桜について一番見事に書いた小説はなんだろうか、誰の小説の何ページあたりの桜の場面がすごいとか、例えば水上さんの『櫻守』とか、谷崎さんの『細雪』とか、こういうのは、やっぱり文学をよく知っている人の脳みそが一番あてになるんです。こういうのは今でも検索は難しいだろうと思いますね。むしろ、そういうことを調べようと思った時には、これは国会図書館を頼っても駄目だとか、この手の資料はタイトル検索ではなかなか現れてこないけれども、この図書館なら何か探しようがあるはずだとか、そういう検索についての知識、情報に間違いなく明るくなったということは、自分がものを書く仕事をやっていく上で役に立ったことの一つだろうと思いますね。

『櫻守』（標題紙）　水上勉 著
山本丘人 装幀　新潮社　1969

『細雪』（内表紙）　谷崎潤一郎 著
菅楯彦 装幀　中央公論社　1948

3　インターネットと文字文化の変容

読書の未来やいかに

——作家活動を始められてから、多くの著作を書かれていますが、今、日本における文字文化の状況は、昔から相当に変わってきています。作家のお立場からどのようにお考えですか？

そうですね。簡単にいえば読書ですよね。読んで知識を得るということの大切さというのは、ほとんど絶対的なものだと思います。やはり、記録、文字に書かれているものを読むということは、耳

で聞く、目で見るとはまた独特に違う、ある種の「確かさ」というのがありますね。目で実際のものを見るということも非常に大事なところもあるんですが、やっぱり正確に書かれたものを「読む」ということは大切です。非常に大きな、いろいろな本がある、図書館みたいなものを思い浮かべていただければいいんですが、対象のエリアがとても広いということですよね。例えば、目で見ること、その人の声を聞くことということをいくら重要視したって、我々はプラトンの言葉を聞くことはできないし、会うことはできない訳ですよね。だけど、書庫に入っていけば、プラトンと会うことも、話し合うこともできるんですね。これはもう本や新聞といった活字メディアが持っている、ものすごい力だと思います。

これがIT機器に代わったからといって、書いてある字を見て考えるということでは本質的な差はないようにも思えるんですが、紙の本をめくって知識を得るということは、情報そのものを得るだけではなくて、いろいろ考え、書き手と対話をするような機能が絶対に深いような気がするんですね。IT機器は、自分は「この情報を得たい」と思った時にそこをピシッと狙って、手に入れるには非常に便利なものだけれども、その周辺にあることとか、それを元にしていろいろ考えるとか、書き手と対話をするとか、そういう機能においては、紙のメディアの方がどうも優れているんじゃないか、微妙に人間の生理に適合しているんじゃないかなっていうことを感じています。ただ、それは自分がそうやって生きてきたからであって。まあ15年ぐらい経ったら、物心ついた頃からほとんど紙の本との付き合いがない、基本的に知識はIT機器によって得ているという世代の時代が来そうな気がしますけれども、それは不幸な時代じゃないかと思っています。そういう人たちには、わたしたちが持っているような、微妙な生理的感覚なんていうのは絶対生まれるはずがないんでね。その辺になると状況はずいぶん変わってくるだろうなと思います。

IT機器は、とにかく「早く、安く、手軽に」情報を得るということでは、もう絶対的に優位な訳ですから、どんどん発達してって、紙の本、紙の新聞で情報を得るなんてこと自体が、あと5年も経てば消えていくかもしれないという可能性は否定できないなと思っています。わたしは、どこまでいっても紙の本は残ると思います。けれども、その残るパーセンテージが50%なのか20%なのか5%なのかで、まるで違ってくると思いますが、一般社会にはあまり普及しないものになっていく可能性はもう非常に高いと思います。ただ、今ここでとても大きな問題は、IT機器というのは、「早く・広く・安く・便利に」という点では絶対に優れていますけれども、情報の獲得や提供があまりにも広く、民主的で、平等になってしまったがために、これからの時代は良いものを生んでいくかどうか、ものすごく心配なんです。過去のものはいいんですよ、IT機器で。

活字文化は二千年くらいと言っていいでしょうか、その歴史の中で、ちゃんと良いものを作った人は金銭だけではなく、それだけの評価を受けるという暗黙の了解が社会の中に存在しています。それに対してクリエーターは相応の努力をしている訳で、それはもう血が滲むような努力と言っていいかもしれない。スポーツに例えて言えば、長

嶋の手が5センチ伸びて球が取れるのは、もともと運動神経があったとはいえ、当人がその意味を自覚して、努力してできるようになったからです。優れた能力というのは必ずそうやって作られてきている訳で、もう芸術家はみんな命を張ってやっている。

しかし、そういう努力も、軽く、何となく整えたものと、表面的には等価値に見えていくという、こういう状況の中では、本当のすごい努力をする人はいなくなり、努力をすること自体がだんだんしぼんでいくだろう。そうすると必ず、再生産において良いものは出てこなくなるだろうと思います。すでにジャーナリズムにおいてはその傾向が出てきている。今はいろんな情報がIT機器から入ってくるので、机に座っていたって文章の書ける人ならば適当な記事は作れるんです。けれども、体を張って情報を取ってこなかったらジャーナリズムは駄目なんです。だけど、そんな体を張って取ってきた情報も、机に座って適当に集めて記事を作るのと等質に思われたら、誰が命を張ってまでやるだろうか。どんな時でも特別な志を持った人というのはいる。でも、どんどん少なくなって、全体としてはなくなっていく。IT機器は広く・安く・便利に情報を提供してくれるけれども、これからは、ジャーナリズムの世界も、芸術の世界も本当に良いものが生まれにくい時代になっていくだろうなとわたしは予測していますね。これは大問題だと思います。

文字と文化

——文字表現へ向かう真摯さのようなものはネット上ではもう現れない、また本当に良いものを、膨大なネット情報の中から選んでいくことは難しいということでしょうか。

それはもう、非常に難しいですね。資料の検索でいえば、『源氏物語』について何か調べたいと思った時に、どういう情報の得方が一番いいかっていったら、やっぱり指導教授に聞いて、「君の力と目的がこれくらいなら、この本と、この本と、この本と3冊読んだ方がいい」というのが、一番いい情報なんです。『源氏物語』の概説書は、パソコンで調べたらドドーッと出てきて、「良いものはこれだ」と書いてあるのが50冊も60冊もあって、その中で難易度がAだ、Cだといくら記号が付けてあっても、自分にとって良いもの、自分の力に合ったものを選ぶというのはなかなかできない。世の中にたった1つしかないような特別なもの、例えば、滅多に知らない人の書いた小説を調べたい時にはパソコンの検索でパッとヒットするから役に立つこともあるんですが、ターゲットが

「源氏物語五十四帖　箒木」　廣重 画　［伊勢屋兼吉］刊
嘉永５（1852）　錦絵
（『源氏絵』＜請求記号　寄別2-7-2-5＞所収）
国立国会図書館デジタルコレクション
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1308826

大きければ大きいほど総俯瞰での選択が難しくなってくるでしょうね。それはもう、国立国会図書館なんかでもすぐに直面していることだろうと思いますね。その辺を憂えております。でも、どうしようもないですね、だんだんそういうふうになっていくことは間違いないと思っています。

本質的には似ていることですが、違う例で言えば、わたしは高等学校の教育まで手書きの習慣を何かの形で残してほしい。文字を一画一画書くということは、日本の文化をいろいろな形で辿っていることです。万葉集からこのかた、わたしたちは字を手で書くということによって日本人の文化を辿っているんで、入力してパアンとその字が出てきちゃうということになったら、文字の背後にあるものを考える機能は全く失われていくだろう、これは日本の文化そのものを失っていくことに続くだろうと思います。

ある国の大使が、「日本人が漢字を覚えるのに、あれだけエネルギーを使ってんのはかわいそうだ、まあローマ字にでもした方がずっと楽じゃないか」っていうから、「大使ともあろうものが、あなたあまりにも見識がない。わたしたちはただ文字を記号として役立てるためだけじゃなく、文字を文化として習得しているんだ。あなたがたのアルファベットとは違うんだ。あれによって、“もののあはれ”でもいい、日本人のいろんな思想とか、考えとかいうものを習得しているんであって、単にわたしたちは便利な手段としてだけ文字を獲得してるわけではないんだ」と言ったこともあります。

——確かに、漢字・ひらがな・カタカナの背景には漢詩の時代、かな書き文学の時代と、文化の変遷があるのは面白いです。

だから、明治維新あたりに海外から来た人の中にも、見識の高い外国人がいましてね、その人は、まあ日本語を少し覚えようと思って、最初にイロハを習うんですよ。そういう時に、「日本人は、一番最初に覚える文字をこんな立派な歌で教わるのか」と、驚いたという話を二つぐらい読んだことありますけどね。「イロハニホヘトチリヌルヲ」は深遠なる真理を含んでいる歌ですからね。日本人は多分、子どもの時に無理やり覚えさせられるから、あまり気がつかないと思いますがね。けれど、外国人は大人になってから、日本人のイロハを見る訳だから、あの言葉遊びにこういう意味があるんだよといわれたら、「ええっ」と思って感動するでしょうね。面白い視点だなと思いますけどね。

やっぱり、そういうことがあるからね、手書きをあんまり簡単に失うと、もう、完全にこれは変わりますよ。こういう時代ですから、手で書いた文字なんか見る機会はもう本当に少なくなってきていますよね。大学の論文なんかだってもう、どんどんパソコンになってきているし、高等学校も今にそうなるでしょう。そうすると手書きの習慣は消えていくだろう。わたしは、ペン習字でもいいから、字を習得するということを高等学校までは残してほしいと痛切に思いますね。機械化が進んでいくと、みんなステレオタイプになってしまって、大事なことが失われてく可能性があるけれども、つらいね。この趨勢は止められないだろうなとは思っております。

紙と電子の二重構造

——難しい状況に面していると我々も感じます。

図書館はどうなんだろう？IT機器を皆さんが使えるようにしながら、一方で従来の紙の本を探して出納するという二本立て構造で行く訳でしょう。従来の紙の本を書庫に蓄えて、それを出納するという機能は20年や30年は続いていくだろうと思いますし、50年くらいは一部分はどうしたって必要でしょうね。ということは、機能の二重構造ですよね。わたしが国立国会図書館にいた時に、最初にコンピュータを導入しようと予算折衝をやって、「暫くは業務も二重構造だね」って大蔵省から言われて、「それはどうか覚悟してください」ってサジェストした記憶があります。つまり従来の図書館業務をそのままじゃないにしても残しながら、片方で新しいIT化みたいなことをどんどんやっていかなくちゃならない。ピークになるのは、ある一時でしょうけれども、でもある意味では永遠の二重構造を受け入れるということになるのは、当然覚悟しなくちゃだめだろうな、と40年前に思いましたが、やっぱりその通りのことが今起きているんじゃないでしょうか。

——紙の本もまだ出版され続けていますし、点数もこのところ増えています。一方でそれらを多くの人がアクセスしやすいように電子的に提供しなければならないという二重構造はおっしゃる通りです。

そうでしょう。予算も倍、掛かるわけでしょう（笑）。コンピュータ化というのはそういうことなんだろうなあ。

（第1回了）

1 山梨県立図書館（山梨県甲府市北口２丁目８番１号）。平成24年に甲府駅北口の現在地に新築移転し、同年11月に開館。（同館パンフレット参照）

2 文部省図書館養成所。大正10（1921）年図書館教習所の名で開所。大正14（1925）年、図書館講習所と改称。昭和2（1927）年、帝国図書館構内に専用の教室が新設される。昭和19（1944）年、太平洋戦争のため閉鎖。昭和22（1947）年、帝国図書館付属図書館職員養成所として復活。昭和42(1964)年には図書館短期大学となり、これが母体となって、昭和54（1979）年、筑波に図書館情報大学が発足。平成14（2002）年に筑波大学と統合され、今日に至る。（『世界大百科事典　改訂新版』（平凡社 2007）、「文部省図書館職員養成所年表」（『図書館研究』1959.6）他参照）

3 渋川驍（1905 - 1993）。本名山崎武雄。小説家、文芸評論家。

4 朝倉治彦（1924-2013）。書誌学者。

5 鈴木重三（1919-2010）。近世文学・美術研究者。

6 ドン・ボスコ社。キリスト教関連書籍等販売。

7 『白い巨塔』 1966年公開。製作：永田雅一、監督：山本薩夫、原作：山崎豊子、脚本：橋本忍、撮影：宗川信夫、出演：田宮二郎・東野英治郎他（『ぴあシネマクラブ外国映画＋日本映画2008年最新統合版』　ぴあ　2007）

8 基礎医学：人体の構造・機能についての研究や、臨床についての基礎的研究などを行う医学分野の総称。臨床医学：実地に患者の治療を目的とする医学。（『大辞林　第３版』 三省堂　2006）

9 日本十進分類法では基礎医学は491、臨床医学.診断.治療は492に該当。（『日本十進分類法　新訂９版　本表編』 日本図書館協会　1995）

阿刀田（あとうだ） 高（たかし） 氏　プロフィール

作家、小説家。直木賞選考委員。昭和10年東京生まれ。早稲田大学第一文学部フランス文学科卒業後、国立国会図書館で司書として11年間勤務する。図書館勤務中から執筆活動を続け、昭和53年『冷蔵庫より愛をこめて』でデビュー。

昭和54年『来訪者』で第32回日本推理作家協会賞、同年短編集『ナポレオン狂』で第81回直木賞受賞。平成7年『新トロイア物語』で第29回吉川英治文学賞受賞。その他、『短編小説のレシピ』『旧約聖書を知っていますか』など著書多数。

平成15年紫綬褒章、平成21年旭日中綬章受章。

平成19年から平成23年まで日本ペンクラブ会長を務める。

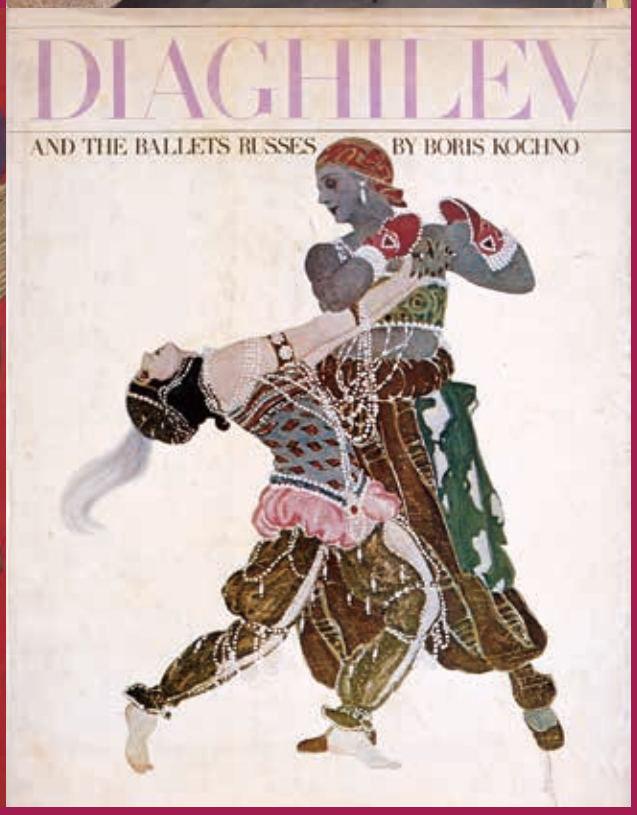
平成24年4月に山梨県立図書館館長就任。

（山梨県立図書館ホームページ「阿刀田館長の部屋」より）
http://www.lib.pref.yamanashi.jp/kancyo/index.html

ようこそ、心躍るひとときへ

—蘆原英了コレクションの世界—

1. バレエ



蘆原英了コレクション—それは国立国会図書館が誇るバレエやシャンソン、演劇、サーカス等に関する資料を集めた世界有数のコレクションです。蘆原コレクションの世界を、バレエ、シャンソン、サーカスの視点から、３回シリーズで紹介します。ようこそ、心躍るひとときへ—

■蘆原英了について

蘆原英了（本名：敏信　1907-1981）は滋賀県大津市に生まれ、母方の叔父に画家の藤田嗣治、母のいとこに劇作家、演出家の小山内薫という環境の中で、西洋の文化に親しみながら少年時代を送りました。中でも中学生の時に帝国劇場で見たロシアの至宝、アンナ・パヴロワ（Анна Павловна Павлова　1881-1931）の踊りは、蘆原のその後の生涯に深い影響を及ぼしたと言われます。

慶應義塾大学の仏文科を卒業後、藤田嗣治を頼ってパリに留学し、昭和8（1933）年に帰国した後はバレエやシャンソン、演劇などの分野で研究者、評論家として多大な業績を残しました。自ら足を運び、自身の五感で味わうことを大切にした蘆原。膨大かつ貴重なコレクションは、芸術文化に対するその深い愛情によって生みだされたものと言えます[注1]。

■蘆原英了コレクション

国立国会図書館が所蔵する蘆原英了コレクションはバレエやシャンソン、演劇、サーカス等に関する資料を集めた世界有数のコレクションです。昭和55（1980）年10月に蘆原本人から寄贈の申し出があり、翌年の蘆原没後に正式に寄贈されました。洋図書約5,400点、和図書約3,900点、楽譜約5,200点、レコード約9,300枚、ポスター約200点、錦絵30点のほか、写真、自筆メモつづり、公演プログラム、絵葉書、バレエシューズなどの多様な資料で構成され、他に類を見ない貴重な資料も多く含まれています[注2]。国立国会図書館東京本館の人文総合情報室で利用できるほか、同室内のコレクションコーナーにも資料の一部を展示しています。コレクションの詳細については『蘆原英了コレクション目録』（全5巻　9冊）が刊行されており[注3]、それをもとにNDL-OPACでも書誌データを提供しています。

本連載では3回にわたり、バレエ、シャンソン、サーカスの3つの視点から蘆原英了コレクションの魅力を紹介します。その冒頭を飾るのは、バレエ関係資料です。

注1　蘆原英了と蘆原コレクション寄贈の経緯に関する参考文献

・蘆原英了『僕の二人のおじさん、藤田嗣治と小山内薫』新宿書房 2007　＜請求記号　GK38-H35＞ pp.302-308 年譜
・宮坂 逸郎「蘆原英了コレクション紹介-1」（『国立国会図書館月報』（253）1982.4　pp.2-9 ）
・宮坂 逸郎「蘆原英了コレクション紹介-2」（『国立国会図書館月報』（254）1982.5　pp.14-19）

以上2点　＜請求記号　Z21-146＞

注2　蘆原英了コレクションに関する参考文献

・宮坂 逸郎「蘆原英了コレクション紹介-3-」（『国立国会図書館月報』（255）1982.6 pp.15-19）
・宮坂 逸郎「蘆原英了コレクション紹介-4-」（『国立国会図書館月報』（256）1982.7 pp.12-16）
・宮坂 逸郎「蘆原英了コレクション紹介-5-」（『国立国会図書館月報』（258）1982.9 pp.24-27）
・宮坂 逸郎「蘆原英了コレクション紹介-6-」（『国立国会図書館月報』（259）1982.10 pp.20-23）

■バレエ関係資料

バレエや舞踊に関する資料は、蘆原英了コレクションにおける中核の一つと言ってよいでしょう。おもに洋書、公演プログラム、ポスターから構成され、ほかにも絵葉書、写真、バレエシューズのような珍しい物も含まれています。バレエダンサーや舞踊団、舞台美術、各国の舞踊文化など、多岐テーマにわたる洋書や、国内外のバレエ団による公演プログラムの数々は、極めて貴重な資料です。

・宮坂 逸郎「蘆原英了コレクション紹介-7-」
（『国立国会図書館月報』（260）1982.11 pp.24-27）
・宮坂 逸郎「蘆原英了コレクション紹介-8-」
（『国立国会図書館月報』（262）1983.1 pp.18-21）
以上全て ＜請求記号 Z21-146＞

注3 『蘆原英了コレクション目録』 国立国会図書館 1982-2002 ＜請求記号 KD1-47＞
第1巻 洋書編 第1分冊（舞踊）
第1巻 洋書編 第2分冊（シャンソン・演劇・サーカス）
第2巻 楽譜編
第3巻 レコード編 第1分冊（シャンソン A～F）
第3巻 レコード編 第2分冊（シャンソン G～O）
第3巻 レコード編 第3分冊（シャンソン P～Z・初期歌謡・SPレコード）
第3巻 レコード編 第4分冊（索引・邦訳標題一覧）
第4巻 レコード編
第5巻 補遺編（簡易整理資料）

バレエ関係資料 あれこれ

図1 *Prix de Lausanne, 31 janvier et 1e février 1981 : 9e Concours international pour jeunes danseurs Théâtre de Beaulieu.*
1981 ＜請求記号 VA251-412＞

毎年、スイスのローザンヌで行われ、15歳から18歳までの若手バレエダンサーの登竜門として知られるローザンヌ国際バレエコンクール。上は、1981年に行われた第9回コンクールのプログラムです。決選進出者のリストもはさみこまれています。

図2　「チャイコフスキー記念東京バレエ団陽春特別公演：上野東京文化会館」
ジャパン・アート・スタッフ（制作）
1968　＜請求記号　VA251-1294＞

チャイコフスキー記念東京バレエ団の公演「ジゼル」のプログラム。20世紀を代表するロシアの伝説的なバレリーナ、ガリーナ・ウラノワ（Галина Сергеевна Ула́нова 1910-1998）が指導のために来日したことでも話題となりました。蘆原自身もウラノワへの思いをつづった一文を寄稿しています。

図3　*The Decorative art of Léon Bakst.*
appreciation by Arséne Alexander, notes on the ballet by Jean Cocteau, translated from the French by Harry Melvill.　Dover Publications,　1972
＜請求記号　VA36-12＞

ロシアの画家、舞台美術家として知られる、レオン・バクスト（Леон Николаевич Бакст　1866-1924）の舞台芸術や衣装デザイン、絵画作品を収録した資料です。目の覚めるような多彩な衣装デッサンは、20世紀初頭のパリで一世を風靡した「バレエ・リュス」の世界を鮮やかによみがえらせてくれます。

図4　「チャイコフスキー記念東京バレエ団1980年陽春特別公演：東京文化会館」
［チャイコフスキー記念東京バレエ団，毎日新聞社］
1980　＜請求記号　VA251-1316＞

チャイコフスキー記念東京バレエ団の公演プログラムです。この公演は「ジゼル」、「海賊」など多様な作品の粋を集めた変化に富んだ構成となっています。表紙は「海賊」のパ・ド・ドゥ[注4]の一瞬をとらえた美しい一枚です。

■描かれたバレリーナたち

それでは、このバレエ関係資料の中から手に取った1冊の本、*The Romantic ballet in lithographs of the time*とともに、あるバレリーナの半生をたどってみることにしましょう。

1827年7月23日。この日、パリ・オペラ座の舞台に一人のバレリーナが舞い降ります。優雅に軽やかに、まるでシルフ（空気の精）のように舞い踊るその姿は、パリの観客の心をたちまちのうちに虜にしたのです。彼女の名はマリー・タリオーニ（Marie Taglioni　1804-1884）。それは近代バレエの幕開けを告げる出来事でもありました。

マリー・タリオーニは、祖父母の代から多くのダンサーや振付家を輩出していたイタリア人バレエ一家に生まれました。幼年時代からバレエを始めたマリーは、バレリーナとしてのデビューを前に、後に振付家として名を馳せる父フィリッポによる特訓を受けます。毎日の長時間におよぶ稽古は、疲労のあまり気絶するほど厳しいものでしたが、父親との二人三脚による、血のにじむような努力の結果、マリー父娘は従来のバレエとは一線を画す新しいスタイルのバレエを生み出すことになります。なかでもその象徴とも言える技術の一つが「ポワント」、すなわち、つま先で立って踊る技術でした。

バレエの歴史において、初めてポワントで踊ったのはマリーではありません。マリーの登場する十数年ほど前からすでに、ポワントで踊ったと思われるバレリーナの記録が散見されます。しかし彼女らのポワントは、芸術というよりはむしろ離れ業というべき代物でした。そして踊り手は技巧に走るあまり、肝心の踊りに優美さを欠いていたのです。マリー父娘はこのポワントをバレエ技術の全体に組み込むことにより、難しい技術を用いながらも柔らかく控え目で、かつ優雅で軽やかな新しい様式のバレエを完成させたのです。それは当時のヨーロッパを席巻していたロマン主義を象徴するにふさわしい芸術でした。舞台上の、遠い異国や非現実的な世界を妖精のように舞うマリーの姿は、感性や想像力、幻想、神秘、異国的な要素などを称揚する風潮を体現するものとして、熱狂的に受け入れられました。『ジゼル』など現代にも愛され続ける作品を生み出した「ロマンティック・バレエ」[注5]は、こうして誕生したのです。

注4　男女二人で構成される踊りで、二人の入場（アントレ）、ゆったりとした曲に乗り男性に支えられた女性が優雅なポーズを見せる踊り（アダージュ）、男女それぞれのソロ（ヴァリアシオン）、二人で高度な技術を披露する華やかな踊り（コーダ）で構成されます。

注5　1830 - 40年代にヨーロッパで大流行したバレエの様式。ロマン主義の影響を色濃く反映し、異国趣味や妖精、現実と非現実の対比などを軸にした作品が多く、19世紀末にロシアで成立した「クラシック・バレエ」と区別されます。

図5　マリー・タリオーニ
≪フロールとゼフィール　Flore et Zéphyre≫より
A.E.Chalon 原画

図6　マリー・タリオーニ
≪ラ・シルフィード　La Sylphide≫より
A.E. Chalon 原画

The Romantic ballet in lithographs of the time は、この時代のバレリーナたちを描いたリトグラフ（石版画）の複製版を収録した資料です（図5～7）。リトグラフは近代的な複製印刷の技術として、当時の商業美術にも多用された版画技法の一種です。写真が一般的でなかった時代において、チュチュ[注6]の襞一筋に至るまで緻密に描き出すリトグラフは、さながら現代のブロマイドに通じるものであると言えるでしょう。あたかも本物の森の中であるかのような背景や、空気を大きくはらむチュチュなどを見れば、ここに描かれた世界が虚実をない交ぜにした、観客の理想の姿であったことがうかがえます。

オペラ座でセンセーショナルなデビューを遂げたマリーの名は、1832年、フィリッポの振付による『ラ・シルフィード』[注7]の成功により頂点を極めます。しかしその独壇場は長くは続きませんでした。そのわずか2年後、もう一人の卓越したバレリーナである、オーストリア出身のファニー・エルスラー（Fanny Elssler　1810-1884）がオペラ座にデビューするのです。当時のオペラ座の経営者は、扱いにくいマリーをけん制するとともに、二人を競わせることでバレエの世界をさらに盛り上げることを狙ったのです。純潔で精神性を象徴する「キリスト教的な」マリーと、官能とエロティシズムを漂わせる「異教的な」エルスラー。両者のスタイルの違いはリトグラフに描かれた姿からもうかがえます。図5、6に描かれたマリーがふわふわと宙を舞い、柔らかく清楚な印象を与える一方で、図7のエルスラーは地に足をつけ、しなやかな中にも力強さを併せ持つイメージで描かれています。こうした極めて対称的な二人のライバル関係は、それぞれを支持する熱狂的なファンを生み、さらなるバレエ熱を掻き立てて

図7　ファニー・エルスラー
≪杖をついた悪魔　Le Diable Boiteux≫より
Deveria 原画

◆紹介資料

Cyril W. Beaumont and Sacheverell Sitwell. *The Romantic ballet in lithographs of the time.* Faber and Faber, 1938
＜請求記号　VA34-131＞

◆参考文献
・鈴木晶 編著 『バレエとダンスの歴史：欧米劇場舞踊史』 平凡社　2012　＜請求記号　KD385-J36＞
・鈴木晶 著 『バレエ誕生』 新書館　2002　＜請求記号　KD385-H1＞
・薄井憲二 著 『バレエ：誕生から現代までの歴史』 音楽之友社　1999　＜請求記号　KD385-G27＞

いきました。

しかし一時代を築き上げたマリーの栄光にも、あっけなく終焉の時が訪れます。オペラ座はもはや唯一無二のスターではなくなったマリーを手放す決意をしたのです。デビューから10年後の1837年4月、オペラ座での最後の公演を終えたマリーは、惜しまれつつもパリを後にし、父とともに次なる新天地ロシアへと旅立って行きます。

そのロシアではヨーロッパから伝わったロマンティック・バレエに加えてクラシック・バレエという新たな様式が生み出され、皇帝の直接の庇護のもとでバレエ文化がさらなる発展をとげていくこととなります。一方でヨーロッパにおけるロマンティック・バレエは衰退の道をたどるのです。大衆化・商業化したロマンティック・バレエが女性の踊り手に対する極端な崇拝を生む一方で、新たな魅力を生みだす活力を失っていったことも一因と言えるでしょう。そのパリに再びバレエの熱狂が戻るのは、ロシアのバレエが到来する20世紀初頭のことになります[注8]。

（利用者サービス部人文課　鬼塚（おにづか）　通子（みちこ））

注6　バレリーナのスカート。空気をはらみやすいように薄地のモスリンなどの布を何枚も重ねて作られます。ロマンティック・バレエではふくらはぎや足首までの長いチュチュ（ロマンティック・チュチュ）を、クラシック・バレエではごく短く水平に張り出したチュチュ（クラシック・チュチュ）を用います。

注7　1832年3月12日初演。ロマンティック・バレエにおける最初の独立した作品です。「シルフィード」は「空気や風の精」を意味します。現実に背を向けシルフィードに恋をするものの、最後はシルフィードも現実の世界における幸せをも失ってしまう男性の物語です。

注8　金井 ゆき「今月の一冊 国立国会図書館の蔵書からニジンスキーのダンス・デッサン バレエ・リュスの舞台イラスト集」（『国立国会図書館月報』（579）2009.6 pp.2-3　＜請求記号　Z21-146＞）

過去と未来をつなぐWARP

国立国会図書館では日本のウェブサイトを集めて保存しています。

図書館がなぜウェブサイトを保存するのか不思議に思われたでしょうか。これまで人は書物に情報を記録し、後世に伝えてきました。私たちが過去を知ることができるのも書物が残されているからです。

ところが、インターネットの急速な普及とともに、情報がウェブサイトに記録されるようになってきました。ウェブサイトを見れば雑誌や新聞よりも早く最新情報を知ることができます。しかし、それは同時に情報の更新や削除が頻繁に行われることに他なりません。ウェブサイトに記録された情報は、集めて保存しておかなければ永久に失われてしまう可能性があります。では、いつ集めるのでしょう？――「今でしょ！」

こうした理由から、国立国会図書館では「インターネット資料収集保存事業（WARP）」として日本のウェブサイトを保存しているわけです。現在、国の機関や自治体など公的機関のウェブサイトは法律に基づき網羅的に集め、民間のウェブサイトは許諾が得られたもののみを対象としています。

ぜひ一度WARPのトップページ（http://warp.da.ndl.go.jp/）をご覧ください。どのようなウェブサイトを集めているのかは「今月の特集」の画像からすぐに分かります。そのコーナーでは保存したウェブサイトの紹介やWARPの豆知識などを月替わりで掲載しています。毎月驚きや感動で「お・も・て・な・し」できるようWARP担当が選んでいます。

月間アクセスランキングに掲載されている機関の中には、すでにウェブサイトが消失してしまったものや、過去の情報が削除されているものもあります。これらのように数年のうちに消えてしまうウェブサイトへ、引き続きアクセスができるよう保存していくとともに、後世の人々のためウェブサイトを歴史資料として残していくこともWARPの重要な役割です。ウェブサイトは情報量の多さが特徴の一つと言えます。将来、その巨大な規模の情報の中から今以上の価値が見出されるかもしれません。いつかは価値が「倍返し」だ！と思いつつ、地道にウェブサイトを集める日々は続きます。

（電子図書館課ネットワーク情報第一係　JeJeJe）

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、
日本国内の出版物を広く収集しています。
ここでは、主として取次店を通さない
国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

じょせつき
創立50周年記念社史

日本除雪機製作所社史編纂委員会 編　日本除雪機製作所 刊
2012.4　148p　30cm　　＜請求記号　DH22-J1073＞

雪国の冬は長い。つかの間の夏が過ぎ、秋の気配が漂うと、ほどなく小雪が舞い始める。そのうちに一面が白で覆われ、春までしばらくの間、雪とともに暮らす。雪を克服する「克雪」、雪を利活用する「利雪」、雪に親しむ「親雪」。雪と共生するため、雪国に暮らす人々は知恵を絞ってきた。中でも「除雪」は、切実な課題である。生活の足を確保するため、時には「白魔」と称されるほど猛威を振るう雪に立ち向かう。

本書は、北海道札幌市に本社を置く除雪機メーカー「株式会社日本除雪機製作所」の創立50周年記念社史である。会社の歴史とともに、除雪の歴史をたどることができる。

本書によると、北海道における道路除雪の始まりは、屯田兵村で明治9年に定められた「除雪当番心得」。屯田兵が組になり、三尺（約90cm）の道幅を足で踏み固めた。明治19年頃には、ロシアから「馬そり」が輸入され、それに三角形の木製除雪具を取り付けて除雪した。機械による一般道路の本格的な除雪は、戦後を待たなければならない。進駐米軍の要請で、物資輸送を目的とし、旧陸海軍が基地や飛行場を除雪するために使用していた除雪車を用いたのが最初だという。

一方、鉄道除雪の始まりは、明治14年に完成した「雪払車」。木造の車体の前後に一部鉄板を張ったものを、蒸気機関車で押し進めて除雪する。開拓使が開鉱した幌内炭山からの石炭を輸送するために敷設された幌内鉄道で使われたが、木製ゆえに車体は軽く、よく脱線したそうだ。自力で走行し、かつ除雪もできる国産初のロータリー式ディーゼル機関車が開発されたのは昭和34年のことで、これを開発した会社を前身として、日本除雪機製作所は誕生した。

「我国降雪地帯に於ける冬季陸上交通の安全を確保し、聊（いささ）か国民生活の文化向上に微力を捧げ度…」とは、本書に収められた創業者による会社設立時の挨拶の一部である。それから半世紀、設立の意思を継ぎ、除雪機の開発・製造に取り組んできた様子が紹介されている。交通網の発達やそれに伴う生活の変化に合わせるように、進化していく除雪機の様子を収めた写真も数多く掲載されており、それを眺めるだけでも、時代の移り変わりを感じることができる。

昨年の冬は、各地で記録的な積雪となり、自然の威力を痛感した。それでも、除雪機の進化と除雪体制の整備により、冬季の社会生活や経済活動は、昔とは比較にならないほど充実したものとなっている。 除雪に尽力した先人の歩みを知り、雪国の暮らしの今と昔に思いを馳せる一冊である。

（利用者サービス部サービス企画課　佐藤（さとう）　菜緒恵（なおえ））

※入手に関するお問い合わせ先
日本除雪機製作所　http://www.nichijo.jp/index.html

日本の子どもの文学

国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み

「児童文学者」コーナーから「21世紀の子どもの本」コーナーへ

展示会「日本の子どもの文学」では、児童文学者コーナーを設け、代表的な児童文学者の作品を半年ごとに入れかえながら展示してきました。これまで、石井桃子、小川未明、谷川俊太郎、宮沢賢治、新美南吉、那須正幹の作品と業績を紹介してきたこのコーナーは今回で終了し、2月から「21世紀の子どもの本」にリニューアルします。

児童文学者コーナーの最後を飾る第6回の展示内容と、新しく始まるコーナーをご紹介します。

写真1　児童文学者コーナー（第6回）那須正幹

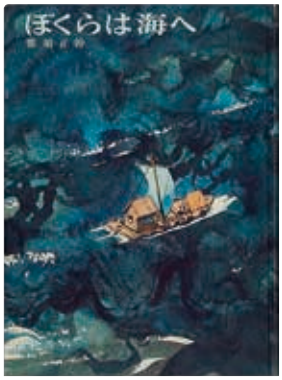


写真2　『ぼくらは海へ』
那須正幹 作　安徳瑛 絵　偕成社　1980

写真3　『それいけズッコケ三人組』
那須正幹 作　前川かずお 絵　ポプラ社　1978

● 児童文学者コーナー（第6回）那須正幹

現在、第6回児童文学者コーナーで、那須正幹をとりあげ紹介しています（～2月23日）（写真1）。

デビュー作『首なし地ぞうの宝』（1972）、『絵で読む広島の原爆』（西村繁男 絵　1995）や＜ヒロシマ＞三部作から『ヒロシマ．1（歩き出した日）』（2011）などの戦争と平和を考える作品、シリアスなテーマが子どもの文学の新たな転換点となった『ぼくらは海へ』（1980）（写真2）、＜ズッコケ三人組＞シリーズ（写真3）やその他のエンターテインメント作品など、多様なテーマと意欲的なスタイルをもつ那須正幹氏の作品を宮川健郎氏（本展示会監修者、武蔵野大学教授）の解説とともに紹介しています。

平成25年10月5日（土）には、那須正幹氏を国際子ども図書館にお呼びして「那須正幹さんに聞く―ズッコケ三人組からのメッセージ―」と題する講演会を開催しました。講演では、ユーモアあふれる語り口で＜ズッコケ三人組＞シリーズ誕生のエピソードや、作品に込めた思い、これからの創作活動への抱負などをお話しいただきました。また後半は、宮川氏との対談の中で、那須作品の世界が掘り下げられ、幅広い年代層の参加者に楽しい時間を共有していただくことができました。この講演会については、本誌638号（2014年5月）号で詳しく紹介する予定です。

写真4（左）
『くつやのねこ』
今井彩乃 文・絵
BL出版　2010

写真5（右）
『あさになったので
まどをあけますよ』
荒井良二 著
偕成社　2011

国境を越えた絵本作りが行われるようになったのも大きな特色です。『くつやのねこ』（今井彩乃 文・絵 2010）（写真4）、『ぼくは...』（三浦太郎 著　2005）などは、最初に海外で出版されその後日本語版が刊行された「逆輸入絵本」です。また、『Little tree = Petit arbre』（駒形克己 作　2008）は日本とフランスで共同出版された絵本、<日・中・韓平和絵本>シリーズは日本、中国、韓国3か国の作家と出版社による共同出版の試みです。

そして、2011年3月11日の東日本大震災発生以降、不安を抱えている親と子にいかに希望を伝えるかが模索されてきています。子どもたちに笑顔を届ける『ラーメンちゃん』（長谷川義史 作　2011）、震災に向き合う『はしれ、上へ！つなみてんでんこ』（指田和 文　伊藤秀男 絵 2013）、今そこにある日常の貴さを描いた『あさになったのでまどをあけますよ』（荒井良二 著 2011）（写真5）など、たくさんの絵本が生み出されています。

今を生きる大人が今を生きる子どもたちに向けて送り出した新しい表現をご覧ください。

（国際子ども図書館「日本の子どもの文学」展示班）

● 特別コーナー「21世紀の子どもの本」

2月25日（火）から、新しく「21世紀の子どもの本」コーナーを設けます。

展示会「日本の子どもの文学」では、明治から1999年までに出版された子どもの本を展示して、文学を通して子どもたちに何が届けられてきたのかを見ていただいています。新コーナーでは、「その1　絵本」（～11月30日）と「その2　児童文学」（12月2日～）の2回にわたって、21世紀の今、大人が子どもたちに届けようとしている作品を展示します。

「その1　絵本」は広松由希子氏（絵本作家・評論家）に監修していただき、21世紀に出版された多様な絵本の中から、「赤ちゃん絵本の広がり」「国境を越えた絵本づくり」「3.11以降の絵本」の3つのテーマにそって、37点の絵本を展示します。

2000（平成12）年にブックスタート*の活動がはじまり、絵本の世界では、長新太の遺作とされる『ころころにゃーん』（<0.1.2えほん>シリーズ 2011）、『ぽぽーぺぽぴぱっぷ』（谷川俊太郎 文　おかざきけんじろう 絵　2004）、『コップちゃん』（中川ひろたか ぶん　100%orange え　2003）など、赤ちゃんを対象とした新鮮な試みにあふれた絵本が多数出版されています。

＊ ブックスタートとは、市区町村自治体が行う0歳児健診等の機会に、「絵本」と「赤ちゃんと絵本を楽しむ体験」を贈る活動。（http://www.bookstart.or.jp/about/index.html　参照）

関連講演会やギャラリートーク（展示解説）の開催を予定しています。詳細は国際子ども図書館ホームページ等でお知らせします。
URL　http://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/now.html

数字で見る国立国会図書館

『国立国会図書館年報　平成24年度』から

ホームページでもご覧になれます。

国立国会図書館ホームページ
＞刊行物＞国立国会図書館年報

http://www.ndl.go.jp/jp/publication/annual/index.html

『国立国会図書館年報　平成24年度』をもとに、国立国会図書館の業務、サービス、組織に関するおもな数字を抜粋しました。

※数字は平成24年3月31日現在

（総務部総務課）

資料収集のための費用

約23億5800万円

うち、納入出版物代償金
約3億9000万円

館全体の予算・決算

歳出予算現額
約193億6300万円

決算額
約185億2700万円

前年度からの繰越額 約3億9200万円
次年度への繰越額 約4億3500万円

職員数

890人

男性　50%
女性　50%

専門調査員・管理職のうち女性の割合　約30%

受入点数

104万2082点

図書	21万5406点
雑誌・新聞	57万4509点
マイクロ資料	18万5986点
映像資料	8284点
録音資料	1万2311点
機械可読資料（CD、DVD等）	8176点
地図資料	4977点
楽譜	824点
博士論文	1万6570点
文書類	1万2394点
点字・大活字資料	960点
など	

図書や雑誌のほか、さまざまな資料を収集。平成14年度から、公的機関やイベントのサイトなどインターネット情報も収集している。

インターネット資料収集保存事業（WARP）
1万1784件

媒体変換

デジタル化
3212点分

デジタル化等により媒体を変換し、原資料の代替として利用することにより、原資料の劣化を防ぐ。

書誌データ作成

62万7333件

図書	18万9282件
雑誌・新聞	2822件
非図書資料	5万4077件
雑誌記事索引	38万1152件

書名、著者名、所在情報などの書誌データ、日本の出版物の記録である全国書誌を作成し、ホームページを通じて提供している。

雑誌・新聞のデータ更新（改題など）　1万　357件

所蔵点数

3943万　946点

図書	1009万6114点
雑誌・新聞	1540万7485点
マイクロ資料	912万　195点
映像資料	28万9254点
録音資料	68万1338点
機械可読資料（CD、DVD等）	11万5049点
地図資料	54万6379点
楽譜	1万4792点
博士論文	57万1266点
文書類	35万　905点
点字・大活字資料	3万3454点
など	

納本、購入、寄贈、交換などさまざまな方法で入手している。

施設別の所蔵点数は次のとおり。

東京本館	2574万3857点
関西館	1250万7883点
国際子ども図書館	52万2444点

インターネット資料収集保存事業（WARP）
5万5749件

資料の収集・整理・保存に関すること　人事・財政・施設に関すること
サービスに関すること

国会へのサービス 依頼調査回答
3万6552件
国会議員等からの依頼に基づき、国政課題や内外の諸事情に関する調査、法案の分析・評価などを行っている。

行政・司法支部図書館へのサービス
貸出し9308点
支部図書館制度に基づき、各府省庁および最高裁判所に支部図書館が設置されている。この図書館ネットワークをもとに、図書館サービス、資料の交換が行われている。

一般へのサービス
来館者68万3788人

東京本館	50万7102人
関西館	6万4767人
国際子ども図書館	11万1919人

開館日数は東京本館・関西館は280日、国際子ども図書館は287日。

ホームページへのアクセス
2092万1601件
1日平均5万7319件
インターネットを通じて、蔵書目録、国会会議録等の各種データベース、調べものに役立つ情報などが利用できる。

一般へのサービス
閲覧215万4690点

東京本館	203万4121点
関西館	10万 118点
国際子ども図書館	2万 451点

来館して申し込む閲覧サービス。

一般へのサービス
見学・参観9026人

東京本館	3623人
関西館	2473人
国際子ども図書館	2930人

見学のお申し込みは本誌表紙裏参照。

国立国会図書館サーチで統合検索できるデータ
7344万8324件
195種類のデータベース
当館や他機関が保有する冊子体・デジタル化された画像・音声等の様々な形態の情報資源を検索。

一般へのサービス レファレンス・サービス
98万2977件

東京本館	90万6605件
関西館	6万3847件
国際子ども図書館	1万2525件

口頭、文書、電話により回答する。

一般へのサービス 来館複写申込
109万9547件

東京本館	100万6168件
関西館	8万8058件
国際子ども図書館	5321件

来館して申し込む複写サービス。

デジタル化資料の提供数
インターネット
47万6112点
館内限定
179万6869点
貴重書・準貴重書を含む江戸期以前の和漢書および1968年までに刊行された図書等の本文デジタル画像。

一般へのサービス 図書館等への貸出し
2万2590点

東京本館	6796点
関西館	3145点
国際子ども図書館	1万2649点

図書館への貸出し、小中学生向けの学校図書館セット貸出し、展示会に出品するための貸出しがある。

一般へのサービス 遠隔複写申込
25万6647件

東京本館	17万1433件
関西館	8万4556件
国際子ども図書館	658件

来館せずに、ホームページ等を通じて申し込む複写サービス。

建物延べ面積
21万5166㎡

東京本館	14万7853㎡
国会分館	1331㎡
関西館	5万9311㎡
国際子ども図書館	6671㎡

書庫面積
10万4106㎡

東京本館	7万8046㎡
国会分館	609㎡
関西館	2万3926㎡
国際子ども図書館	1525㎡

閲覧スペース面積
2万4837㎡

東京本館	1万8983㎡
国会分館	562㎡
関西館	4265㎡
国際子ども図書館	1027㎡

法規の制定

【規程第３号】国立国会図書館職員定員規程の一部を改正する規程

（平成25年11月22日制定）

国会職員に係る配偶者同行休業制度の導入に伴い、国立国会図書館職員の定員から配偶者同行休業をしている職員を除いた。この法規は、国会職員の配偶者同行休業に関する法律（平成25年法律第80号）の施行の日から施行される。

改正後の国立国会図書館職員定員規程（昭和33年国立国会図書館規程第１号）は、この法規の施行後、国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞国立国会図書館について＞関係法規（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/laws.html）に掲載する予定である。

平成25年度国立国会図書館長と行政・司法各部門支部図書館長との懇談会

平成25年12月13日、東京本館において標記の懇談会を開催した。これは、各府省庁および最高裁判所に置かれた支部図書館の充実に資するため、支部図書館長等を招いて毎年行っているものである。

国立国会図書館（中央館）から、最近の中央館と支部図書館との連携の状況および東日本大震災の記録を残すための当館の取り組みについて報告し、大震災関係資料の収集について協力を呼びかけた。

支部図書館からは、長谷川秀司支部消費者庁図書館長が、設置後４年目の現状と蔵書構築の課題について、熊谷和哉支部環境省図書館長が、同館の現況と東日本大震災被害調査の経験に基づく記録収集の重要性について報告した。

また、生貝直人氏（情報・システム研究機構新領域融合研究センター融合プロジェクト特任研究員）が、欧州委員会におけるオープンデータ戦略（2013）の概要、オープンデータの著作権ライセンスとしてのクリエイティブ・コモンズの活用と各国政府独自のライセンス、そして文化資源デジタルアーカイブにおける著作権者が不明な「孤児作品」（orphan works）問題への対応等について特別講演を行った。

国際政策セミナー「欧州におけるリージョナリズム—道州制論議への示唆—」

平成25年11月27日、東京本館で標記セミナーを開催し、132名の参加があった。このセミナーは、調査及び立法考査局が行っている総合調査プロジェクト「21世紀の地方分権—道州制論議に向けて—」の一環として、スコットランド政治の専門家であるポール・ケァーニ 氏（Dr. Paul Cairney、英国スターリング大学教授）を招へいして行ったものである。

ケァーニ氏は「日本は連合王国における『リージョナリズム』と権限委譲から何を学べるか」と題する基調講演を行った。引き続いて、山崎幹根氏（北海道大学公共政策大学院教授）、穴見明氏（大東文化大学法学部教授）、山﨑榮一氏（自治研修協会理事）、山口和人（当館専門調査員、調査及び立法考査局行政法務調査室主任）から英国、スウェーデン、フランス、ドイツにおけるリージョナリズムの現状に関する報告を行った。

その後、廣田全男氏（横浜市立大学学術院国際総合科学群教授、当館客員調査員）をコーディネーターとして、パネルディスカッションが行われた。会場からは、2014年に行われるスコットランド独立についての住民投票の見通しや各国のリージョナリズムと日本の道州制論議の共通点と相違点を問うものなど多数の質問があった。

本セミナーの記録は、平成25年度中に刊行する予定である。

子どものための絵本と音楽の会

国際子ども図書館では、東京・春・音楽祭実行委員会との共催で、「子どものための絵本と音楽の会」を開催します。ヴァイオリンとチェロの演奏にあわせて、クロケット・ジョンソン作の絵本『はろるど まほうの くにへ』の朗読を楽しむ会です。入場は無料です。

○日　　時　3月23日（日）13：30～、15：00～（各回約30分）
○会　　場　国際子ども図書館3階ホール
○対　　象　3歳から中学生までの子どもおよびその保護者
　　＊原則として子ども1名につき保護者1名
○定　　員　各回100名程度
　　＊申込多数の場合は抽選。当落にかかわらず3月14日（金）までにご連絡します。

○申込方法

次の事項を明記の上、往復はがきまたはホームページの応募フォームにより、2月28日（金）までにお申し込みください（必着）。

＊応募フォームは東京・春・音楽祭ホームページに掲載されています。

①参加希望時間、②参加人数（保護者含む）、③参加者全員の氏名および子どもの年齢、④住所、⑤電話・FAX番号

○申込み・問合せ先
東京・春・音楽祭実行委員会「絵本と音楽の会」係
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-105　神保町三井ビルディング
ホームページURL　http://www.tokyo-harusai.com/
電話　03（3296）0600

平成25年度 アジア情報研修

国内の図書館等におけるアジア情報提供サービスの向上に資することを目的として、平成25年度アジア情報研修を実施します。

○日　　時　3月20日（木）10:00～17:30

○会　　場　国立国会図書館 関西館 第1研修室

○対　　象　大学図書館、専門図書館、公共図書館等でアジアに関連する情報を扱う方。アジア言語の知識は不問で、初心者向きの講座です。

○定　　員　30名。応募多数の場合は調整します。

○テ ー マ　日本語および英語で調べるアジア情報

○申込期限　3月7日（金）。定員を超えた時点で受付を終了します。

○内　　容　（予定）

10:10-12:00	日本語および英語で調べる中国情報（講義・実習）
13:30-15:00	日本語および英語で調べる韓国情報（講義・実習）
15:10-15:40	アジア情報室・書庫見学
15:50-17:20	日本語および英語で調べる東南アジア情報（講義・実習）
17:20-17:30	修了証書授与

＊終了後、懇親会（会費制、希望者のみ）を予定しています。

○参 加 費　無料。ただし旅費・滞在費等は受講者の負担とします。

○申込方法

電子メールまたはFAXでお申し込みください。タイトル・件名欄に「アジア情報研修申込み」と記載し、本文に次の事項を明記してください。

①氏名（ふりがな）、②所属機関・所在地、③所属部署・職名、④電話番号（日中のご連絡先）、⑤電子メールアドレス（利用できない方はFAX番号）、⑥懇親会への参加希望の有無

＊受講の可否は3月11日（火）までにお知らせします。

○申込み・問合せ先

国立国会図書館 関西館 アジア情報課

電子メール　k-azia@ndl.go.jp　　FAX　0774（94）9115

電話　0774（98）1371（直通）

■「国立国会図書館デジタルコレクション」にリニューアルします

1月21日（火）から、国立国会図書館がデジタル化した資料等を提供するウェブサイト「国立国会図書館デジタル化資料」を、「国立国会図書館デジタルコレクション」にリニューアルします。

○リニューアルの内容

- トップページのデザインを一新します。
- 新規コレクションとして、おもに昭和期に製作された「科学映像」を追加します（約100点を館内提供）。
- インターネット等で出版（公開）される電子情報で、図書または逐次刊行物に相当するものを収録したコレクションの名称を、これまでの「インターネット資料」から「電子書籍・電子雑誌」に変更します。

＊ウェブサイトおよび収録資料のURLは変わりません。

国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）
＞国立国会図書館デジタルコレクション
URL　http://dl.ndl.go.jp/

○問合せ先

国立国会図書館 関西館 電子図書館課 電子化資料提供係
電子メール　dl@ndl.go.jp
電話　0774-98-1472（直通）

図書館向けデジタル化資料送信サービスを開始します

1月21日（火）から、図書館向けデジタル化資料送信サービスを開始します。

国立国会図書館がデジタル化した資料は、これまでその多くが国立国会図書館の施設内での利用に限られていましたが、今後は国立国会図書館の承認を受けた全国の図書館で閲覧・複写が行えるようになります。

○利用できる資料

国立国会図書館がデジタル化した資料のうち、絶版等の理由で入手困難なものが対象です。サービス開始当初は、約131万点の資料が利用できます。

○利用できる図書館

公共図書館、大学図書館等、著作権法第31条第1項の適用を受ける図書館等が対象です。現在、約90館から利用のお申込みをいただいています。

引き続き、このサービスを利用する図書館を募集しています。多くの図書館からのお申込みをお待ちしています。

利用できる資料および図書館の一覧、サービスの申込手続き等については、ホームページをご覧ください。

国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞図書館員の方へ
＞図書館向けデジタル化資料送信サービス
URL　http://www.ndl.go.jp/jp/library/service_digi/

○問合せ先

国立国会図書館 関西館 文献提供課 複写貸出係
電子メール　digi-soshin@ndl.go.jp
電話　0774-98-1330（直通）

関西館小展示（第15回）「日本酒の近代化と洋酒の国産化」

『特命全権大使米欧回覧実記』
博聞社　1878
＜請求記号　34-88＞

『醸造雑誌　第239号』
醸造雑誌社　1897
＜請求記号　雑49-122＞

『大日本麦酒株式会社三十年史』
大日本麦酒　1936
＜請求記号　705-60＞

第15回関西館小展示では、「日本酒の近代化と洋酒の国産化―ニッポンの酒造り」と題して、関西館で所蔵する、明治以降現代に至るまでの日本の酒造りに関する資料を紹介します。

鎖国が解けると日本に洋酒が伝わり、飲まれるようになりました。当初は海外から輸入していましたが、そのうちビールやワイン、ウイスキーの国産化に取り組む人々が現れ、現在では高品質な洋酒が国内で造られるようになりました。一方、古くから親しまれてきた日本酒造りも近代化され、現在の酒造りの基礎ができあがりました。

今回の展示では、日本酒と洋酒の二つの潮流を軸に、近代以降、日本人がどのように酒造りに取り組んできたか、社史や年史類も織り交ぜながらその足跡をたどります。

○開催期間　2月20日（木）～3月29日（土）
（日曜日、国民の祝日・休日、3月19日（水）を除く）
○開催時間　10:00～18:00
○場　　所　関西館 総合閲覧室
○入　　場　無料

関連講演会のご案内

○演　　題　「日本にウイスキーづくりを伝えた男」
○講　　師　簑輪　陽一郎　氏
（アサヒビール株式会社ウイスキーアンバサダー）
○日　　時　3月15日（土）14:00～16:00
※講演終了後、小展示の見学会があります。
○会　　場　関西館 第一研修室
○定　　員　70名　※定員に達し次第、受付を終了します。
○入　　場　無料
○申込方法　次の事項を記載の上、電子メールまたはFAXでお申し込みください。
①件名「小展示講演会申込み」、②氏名（よみがな）、③電話番号（日中のご連絡先）、④FAX番号（FAXでお申込みの場合のみ）
電子メール　k-tenji@ndl.go.jp　　FAX　0774（94）9118
○問合せ先　国立国会図書館 関西館 総務課
電話　0774（98）1223（直通）

国際子ども図書館展示会「子どもを健やかに育てる本2013―厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）」

1月28日（火）から、展示会「子どもを健やかに育てる本2013―厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）」を厚生労働省との共催で開催します。この展示会では、児童の福祉の向上、子どもたちの健やかな育ちに役立てることを目的として厚生労働省社会保障審議会が推薦した絵本や図書49タイトルを手にとってご覧いただくことができます。

幼児向けの絵本から高校生以上も楽しめる図書まで、また、物語からノンフィクションまで、幅広い分野の本を展示しており、子どもの成長段階に合った本に出会うことができます。

ぜひご来場ください。

○開催期間	1月28日（火）～2月23日（日） ※月曜日、国民の祝日・休日、2月19日（水）を除く。
○開催時間	9：30 ～ 17：00
○会　　場	国際子ども図書館3階ホール
○入　　場	無料

○問合せ先

国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課

電話　03（3827）2053（代表）

新刊案内
国立国会図書館の編集・刊行物

外国の立法　立法情報・翻訳・解説　第258号　A4　160頁

季刊　1,890円　　発売　日本図書館協会　（ISBN　978-4-87582-754-2）

＜主要立法（翻訳・解説）＞

- ヘイトクライムに関するアメリカの連邦法
- イギリスにおける2013年王位継承法の制定
- フランスの同性婚法―家族制度の変容―
- フランスの2010年ドメスティック・バイオレンス対策法
- ドイツにおける高レベル放射性廃棄物最終処分地の選定
- ロシアにおけるたばこ規制の動向―公共喫煙禁止法の成立を中心に―
- 台湾の個人情報保護法
- オーストラリアにおける外国軍隊の法的地位に関する法制―1963年国防（訪問軍隊）法を中心に―
- カンボジアの外国人区分所有法

レファレンス　755号　A4　82頁　月刊　1,050円　発売　日本図書館協会

- 公的家賃補助としての住宅手当と住宅扶助
- 我が国の国家公務員制度―これまでの展開及び今後の課題―
- 農作物の鳥獣被害と野生生物保護への対応―山口県での現地調査を踏まえて―（現地調査報告）
- 粒子線治療を中心としたがん先進医療の現状と課題―九州地域の施設訪問を踏まえて―（現地調査報告）

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14　電話　03（3523）0812

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No.634 1 January 2014

CONTENTS

02 New Year Greetings for 2014: Steadily fulfilling our mission

04 <Book of the month - from NDL collections>
Kagami-mochi tells you what New Year's days were like in a count's family

06 Special feature: Interview with Mr. Takashi Atoda
Turning point for books and reading: From the front line of a library again

15 Welcome to an exciting time: World of Eiryo Ashihara Collection
1. Ballet

24 Exhibition at the International Library of Children's Literature "Japanese Children's Literature: A History from the International Library of Children's Literature Collections"
Special feature will change from "Japanese Authors of Children's Literature" to "Children's Literature in the 21st Century"

26 The NDL in figures: from the Annual Report of the NDL, FY2012

22 <Tidbits of information on NDL>
WARP, connecting the past and the future

23 <Books not commercially available>
○*Josetsuki : Sōritsu 50shūnen kinenshashi*

28 <NDL News>
○Rules & regulations
○Annual meeting between the Librarian of the NDL and the Directors of the Branch Libraries in the Executive and Judicial Branches of the Government FY2013
○International Policy Seminar "Regionalism in Europe from a comparative perspective: Implications for Japanese regionalism plan"

30 <Announcements>
○Event at the International Library of Children's Literature: Picture books and music for children
○Training program on Asian information FY2013
○Renewal of webpage for "NDL Digital Collections"
○Start of Digitized Contents Transmission Service for Libraries
○Small exhibition in the Kansai-kan (15) "Modernization of Japanese sake and domestic production of Western liquor"
○Exhibition at the International Library of Children's Literature "Books for healthy growth of children 2013: Cultural Materials (publications) of Child Welfare Recommended by the Social Security Council of the Ministry of Health, Labour and Welfare"
○Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成26年1月号（No.634）
平成26年1月20日発行　定価525円
（本体500円）

発行所　国立国会図書館
編集責任者　田中久徳
〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話　03（3581）2331（代表）
FAX　03（3597）5617
E-mail　geppo@ndl.go.jp

発売　社団法人日本図書館協会
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14
電話　03（3523）0812（販売）
FAX　03（3523）0842
E-mail　hanbai@jla.or.jp

印刷所　株式会社 正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文　中性再生紙使用

「新板馬づくし」
一鵬斎芳藤（歌川芳藤）画　［江戸］　山本久兵衛
［弘化-嘉永頃］
1枚　36.1×25.4cm
（『おもちゃ絵』＜請求記号　寄別3-1-2-4＞所収）

国立国会図書館月報

平成26年1月20日発行（毎月1回20日発行 1月号 通巻634号）

発売：社団法人 日本図書館協会　定価525円（本体500円）

雑誌 03919-01

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。